

中高生・先生の研究活動を大学・企業で支援する

教育応援

2021.9

VOL. 51

回覧

先生方でご回覧ください

特集1

船でつながる
世界の課題、
技術でつながる
未来の海

特集2

課題に向き合う
次世代と
大人の“道標”

中高生のための学会

サイエンスキャッスル2021
エントリー募集中!

主体的な学びを 実現するため、 教育の全てを再編する

かつて、山藤氏がはっとさせられた出来事がある。JICAの仕事で途上国のブータンにいったときのことだ。そこで目の辺りにしたのは、こどもたちの学びたいという意欲の凄まじさだった。彼らの根底には、自分たちの手で未来を、より良い国を作っていきたいという思いがあるのだ。

何のために学ぶのか？

都内のある高校で教鞭をとっていた際、生徒たちがなんだか苦しそうに勉強していると感じた。テストの点数を見て勝った負けたと比較する。その中で、生徒の多くが自己肯定力を失っている現状があった。「日本の子どもたちは、何のために学んでいるのだろうか？2012年頃に、自分自身がぶち当たった壁でした」と当時を振り返る山藤氏。同じアジアにあって、教育インフラが整っているのにも関わらず、学びたい気持ちが低下している日本と、母国語の教科書もない中でキラキラとした目で貪欲に学ぶブータンの子どもたちは、何が違うのか。

それからは、教育活動ひとつひとつに「何のためにやるのか」と自問するようになった。突き詰めれば全ての教育の目的は「子どもたちが幸せに生きていくため」だとすると、確からしい価値観は、持続可能な未来を目指すことではないか。経済発展を追い求め続けてきた社会が、地球の持続可能性を失わせてしまっている現状は明らかだ。このままでは地球が保たない。これからは自分だけでなく、次

の世代までの幸せを考えて行動していかなければいけない。現在山藤氏は、子どもたちとともに、誰かのための未来づくりに本気で取り組む活動を教育現場に導入・実践している。

「余白」の時間に責任をもつ

新渡戸文化中学・高等学校では、クロスカリキュラムという独自のカリキュラムを作り出した。これは、中1から高2までが週1回、1日を自由に設計できる時間割で、教員全員が担当となる。具体的には総合的な探究の時間や、現代社会、生物、化学の基礎科目、学校設定科目の時間を組み合わせて設計している(次年度は家庭基礎の融合も検討中)。圧倒的な「余白」を活用し、生徒たちは自分に取り組むべきテーマを見つけて、主体的に行動する。テーマも方法も自由で、学校の外に出てもいい。

年度の最初に、この時間は教員から教える授業ではないことを明言する。学びは自分に責任があるということ。先生も答えは持っておらず、正しいかはわからないけれど、選択肢のいくつかを示して手助けをするということ。選ぶ、選ばない、取り組む、

さぼる。あるいは生徒が望めば、先生主導で進めるのも選択肢になる。「余白」をどう使うかのすべては自分で決める、ということ徹底して共通認識とする。

ただし、活動そのものを自分一人でやる必要はない。他学年も含めて他の生徒を巻き込んでもいいし、学年や教科担当以外の先生の協力を仰いでもいい。生徒たちは自分だけではできないことにも向き合い、他の人の得意なことを見つめてパートナーシップを構築していく。「重要なのはマインドセットで、使う言葉も意識して変えています。例えば、“できない”は可能性であるというふうに伝えます。仲間と繋がる可能性、自分が成長する可能性です」。

学校全体、教員間の意識共有が要

「主体的な学び」というキーワードがあるが、新渡戸文化学園では全学でその定義を整理することから始めた。心理学者ロジャー・ハート『子どもの参画』を参考に、自校における主体の定義を「生徒自身が意思決定をする」とした。そして学校全体、学年、教科の中で何を伝え、どのように教育活動をデザインするか、毎年春休



新渡戸文化学園 新渡戸文化中学・高等学校

さんとう りよぶん 山藤 旅間 氏

新渡戸文化中学・高等学校教諭・統括校長補佐・高校教育デザイナー、都立高校講師、一般社団法人Think the Earth SDGs for Schoolアドバイザー。

2004年より都立高校で生物の教員となり、オール実験の授業や生徒の「問い」だけで進める授業、生徒が主体的・自立的に学びを進める「対話式・双方向性授業」などを実践。現在は、教科と社会課題をつなげて、生徒自らが解決に向けて「行動する」ことを目指す授業スタイルを確立する。具体的には、企業やNPO/NGOとパートナーシップを組んだPBL(project based Learning)を実施し、現在は100を超えるプロジェクトを生み出している。

みに教員全員で考え、目標を共有する。もちろん、学習指導要領に記載されている最小限の必要事項は教科書に沿ってきちんと教える。しかしそれは、主体的な学びに向かうための基礎学力を身につけるためであり、内容は各教科で厳選している。そうすることで生み出される残りの「余白」を、よりよい未来に向き合う時間とする。

また、すべての教育活動のアウトプットを学校外に向けて発信していくことを意識し、自分の活動が世の中にどう影響を与えるかを生徒たち自身が考えるきっかけになるようにしている。結果として学校外との連携事例も増え、外にプレゼンをすることで主体性も伸びていく。

テーマ=自分らしい生き方を見つける

生徒が取り組むテーマは、長期的な目線で自分の興味、やりたいこと、能力について考え、そこに重なる社会課題をリサーチするという方法をとっている(右写真)。ここで見出すテーマは、自分らしい生き方そのものだ。その先には未来の仕事や生き方があり、その途中に進学先、企業などがあるのかもしれない。「心が動くと、体も

動く。自分が動けば仲間も動いてくれる。自分の好きなことが、誰かの困っていることを解決できたらいいよねと話しています」。実際に、軍艦模型が趣味のある生徒は、持っている駆逐艦名がタイトルに入った本を見つけ、そこから著者であり年少兵として搭乗していた人にインタビューをした。そこから自分たちの世代も戦争について知る機会を作っていかなければいけないという考えに至り、インタビューをした駆逐艦の乗組員だった著者(戦争体験者)を講師に、オンラインで全校生徒とつないだ授業を生み出す活動にまで発展した。

もちろん、すぐにテーマが見つからない

生徒もいる。そんなときは、考え続ける時間を与えることにしているという。「止まっているのではなく、意思ある沈黙をしているだけの状態だと考えています」。教員は一人一人と対話を続け、人間関係を構築する。「まだ動かない生徒を許容する環境を作るのはとても大切です。仮に1年間で具体的なアクションが生まれなくとも、次の学年で、あるいは中学高校の6年間で、もっといえばその先の道で、いつか形になればいい」と山藤氏は話す。最終的なゴールを決めるのは、これから生きる生徒自身なのだ。



「好き」を分解し、分解したタイトルにSDGsのタグをつける。その後、SDGsのタグのキーワードと自分のタイトルキーワードのかけあわせで検索する。本、人、イベント(同じ興味で発信しているもの)をみつけて行動を起こす。